編集後記：1995年１月17日早朝，大阪府と兵庫県の県境付近の街に住んでいた私は震度７に近い揺れに襲われました．阪神・淡路大震災です．ライフラインは寸断され，建物は傾き，私が通っていた大学の校舎は１フロアが全焼しました．私自身は無事だったのですが，すぐ隣の街では多くの方が亡くなられ，人の死の理不尽さを感じました．あの時は，ただ幸運で自分は生かされたと思う一方，人生でもう二度とこれほどの大災害には会わないだろうと漠然と思い込んでいました．

しかし今年３月11日，再び巨大な地震を体験することになりました．東日本大震災です．私のいた茨城県南部は震源近くに比べれば（そして16年前の自らの体験と比べても）揺れは小さかったのですが（おそらく震度５強～６弱程度），本震の継続時間は驚くほど長く，余震は激しく，ライフラインの混乱は16年前の体験を超えるほどでした．そして何よりもTVに映し出される津波の威力に恐怖しました．さらにこの地震は原子力発電所の事故も引き起こし，放射性物質が大量に飛散しました．今私が家族と暮らしている街はホットスポット（周辺地域よりも空間放射線量が高い地域）とマスコミから呼ばれています．

今も16年前と同様，天災・人災に翻弄される自分の小ささを痛感します．しかし，16年前とは異なり，私は地球科学の研究者になりました．今の私なら，ほんの小さな力ですが，被害を測り，正しく理解し，次の災害に備えるという営みに貢献できるような気がします．学会理事長も４月12日付メッセージの中で会員に対して「日頃培った専門的知識を活かして，それぞれの持ち場で我が国の難局を切り抜けるために最大限の努力を行っていただきたく，また学会としてもそのような活動の支援を全力で行いたい」と仰っています．今こそ，我々一人ひとりの志の高さが必要とされていると思います．

（関山　剛）